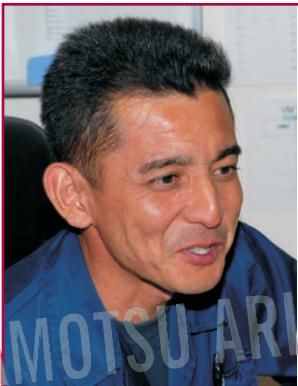


!!!! 今月の SpotLIGHT

嘉手納基地で働く様々な職種の日本人従業員にスポットをあてて毎月紹介していくコーナーです。今月はこの方です。



第18兵站即応中隊 車両整備部 主任
ありめ たもつ
有銘 保さん



Q1. あなたの職種と仕事の内容を教えて下さい。

私は、車両整備部で日本人従業員を統括するフォーマンB（主任）をしています。現在、私を含め98名の日本人従業員がこの部署に配置されています。その内79名は整備士、残り9名は事務職です。この部署では、嘉手納基地の空軍（一部海軍車両）が所有している約2000台の公用車の管理・整備を行っています。定期点検や故障車及び事故車の修理を行っています。車両は普通乗用車や特殊車両（緊急車両や建設車両等）また軍ならではの車両もあります。

この車両整備部に勤める日本人従業員の勤務スケジュールを組んだり、作業が指示通り行われているのか等を確認するのが私の仕事です。米軍基地では日本の祝祭日は勤務日となっていることが多い、ゴールデンウィークや旧盆など、日本人従業員の有給休暇申請が多くなる場合がありますが、上司（軍人）に説明し了解を得て、全体の仕事に支障が出ないように配慮します。また上司と日本人従業員のパイプ役という重要な役割もあります。上司の指示や提案を日本人従業員へ伝達したり、日本人従業員の要望を上司へ伝える等、上手くコミュニケーションをとる事も重要な役割と考えています。

Q2. この職場に勤めてどのくらいですか？

こちらに勤めて1年になります。以前はコミサリー（基地内のスーパーマーケット）で働いていました。コミサリーカラ異動したと聞くと驚かれる方が多いのですが、その前に15年ほど浦添市のキャンプ・キンザー内で整備士として働いていました。また、民間のバイクショップや板金塗装工場で勤めたこともあります。まったく経験がなくこの仕事に就いたわけではありません。軍関係の仕事は、トータルで18年くらいになります。ちなみに、こちらに勤めている整備士の多くが平均勤務年数15年ほどです。



Q3. この仕事での一番の課題は何ですか？

一番の課題は民間整備工場との違いです。最近民間ではハイブリッドカーが増えつつありますが、こちらでもそうです。ただ、そういう車両の整備・技術情報が基地内に入ってきません。通常、民間整備工場の場合、沖縄県自動車整備振興会等に加盟しているので、そのルートから技術情報が入ってきますが、車両整備部はそのような団体に加盟していないので情報が入ってきません。そこで、14名いるフォーマンA（副主任）の皆さんと協力し、足を運んで情報を取り寄せています。また、民間で行われる講習会等にも参加させてもらえるよう私達が積極的にお願いすることもあります。



Q4. 米国製車両も多いと思うですが、それらの整備はどのようにして学びますか？

乗用車は日本車が多く、消防車やフォークリフト等の特殊車両はほとんど米国製です。米国製車両の場合、自分の経験とサービスマニュアル（整備書）を参考にして整備を行います。サービスマニュアルが難しい英語で書かれていることもあります。内容を理解するのが困難な場合は、軍人の整備士に確認をしながら整備を行っています。

Q5. 軍の整備部門と民間整備工場との一番の違いは何ですか？

民間の修理工場の場合、お客様への納車期限があるため、修理をしながらも時間的な制限がありますが、軍の場合、納車時期も大事ですが安全管理を最優先した仕事が出来ます。これは、軍の良さだと思います。

Q6. 同じ職種に就こうと考えている方へアドバイスは？

ここでのフォーマン職は、整備士免許と経験が重視されます。管理職なので、ある程度の英語力も要求されます。整備士として勤めたい方は整備士免許と経験が第一条件です。英語力は、必ずしも必要とは思っていません。私もそうでしたが英語は、アメリカ人と接する中で覚えていくのでそれほど整備士に関して英語力は重要視していません。

(写真全て、米空軍アンジェリィーク・ペレツー等軍曹撮影)



訓練移転実施

嘉手納基地の整備要員、
航空自衛隊の装備品について訓練

第18航空団広報局
アンジェリィーク・ペレツー等軍曹

10月2日、茨城県航空自衛隊百里基地において、嘉手納基地所属のF-15戦闘機の訓練移転が実施されました。訓練期間中、嘉手納基地の第67航空機整備部隊は、航空機地上装備品使用について、日本の受け入れ側と共に作業を行いました。米空軍兵が航空自衛隊の航空機地上装備品の訓練を受け、1週間に及ぶ2国間の訓練中、航空機が支障なく離着陸できる安全性を確実にします。

第67航空機整備部隊の訓練 整備を統括する整備計画担当のベンジャミン・アドコック曹長は、「現場にある装備品を使用することは、コスト削減につながり、また全ての航空機地上装備品を運ぶという後方支援面の負担を軽減できます。また空軍兵が様々な種類の装備品を駆使できるようになることは良いことです」と、日本の航空機地上装備品の訓練を受ける利点について述べています。

今回の訓練では、第67航空機整備部隊 装備品中隊 構成部品整備中隊から空軍兵約70名が、この航空機訓練移転に参加する予定です。「この展開任務を成功させるために、各人が大切な役割を担っています」と、アドコック曹長は展開訓練の意義を強調します。航空機用ジャッキ、油圧オイルカート、その他特殊器具をC-130貨物機3機で空輸しました。

過去におけるこのような二国間訓練の主な問題点の一つが、言葉の壁でした。しかし今回は、その問題を和らげてています。「言語の違いのため、多少困難な事がありましたが、今回は派遣団員の中に日本語を話せる要員がいて、相互の意思疎通において大切な役割を果たしています。同じ言葉でも航空自衛隊と米空軍で意味が違うこともあります。特に頭字語による表現は理解しにくいでしよう。」と、アドコック曹長が指摘します。また、航空機展開訓練を通して、参加する若い空軍兵が見識を広め、日本のカウンターパート知る絶好の機会であると付け加えました。

同訓練に初めて参加した第67航空機整備部隊要員のニコラス・トノウ上等兵は、嘉手納では、日本人と一緒に整備作業する機会があまりないと言い、「航空自衛官らの航空機の整備手順、その訓練などをぜひ見てみたい」と、意気込みを語りました。

AVIATION TRAINING RELOCATION EXERCISE



茨城県百里航空自衛隊基地にて



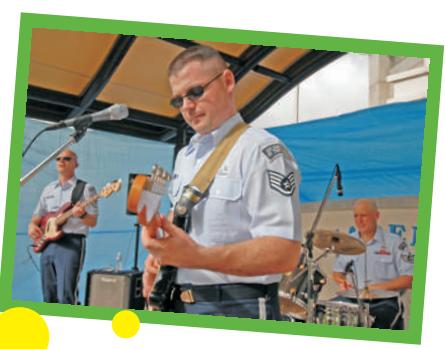
嘉手納の友好の輪

第18航空団広報局

(写真全て、米空軍ジェイソン・レイク二等軍曹撮影)

KADENAサークルフェスティバルが10月31日と11月1日に、嘉手納町ロータリー広場と町役場駐車場で開催されました。フェスティバル実行委員会では、委員長である安森盛雄氏、嘉手納ニュータウン商栄会と嘉手納商工会の皆さんのが中心となり、地元経済の発展と米軍人家族とのよりよい友好関係を築くことを目的として今年の7月からフリーマーケットや交流活動イベントの準備をしてきました。フェスティバル当日はあいにくの雨模様にも関わらず、多くのイベントや出店で賑わいました。第18航空団司令官のケネス ウィルズバック准将とシンディ夫人、第18任務支援群司令官のケリー フレッチャ大佐とシェリー夫人は、宮城篤実嘉手納町長と共に会場を訪れ、空手の見学やサンシン教室への飛び入り練習で祭りを大いに楽しんでいました。

町の皆さんと一緒に今回親善交流イベント部門を担当した第18航空団広報局の川畠茜涉外官は、「雨天にも関わらず、地元と基地内から家族連れが祭り会場を訪れ、コンサート、文化体験教室、スポーツ競技、出店を楽しんでいました」と目を細めます。イベントのハイライトは、この日のために横田基地からやってきた太平洋空軍バンドや、地元の学生バンドによる演奏でした。初日の土曜日には、基地からやってきた米国人らが藍染体験教室、サンシン体験教室に挑戦、またドツジボールゲームにも参加していました。二日目は、エイサー体験教室、縄引き、餅つきが行われました。KADENAサークルフェスティバルは今回初めて実施され、主催の実行委員会は今後も継続することを検討するようです。このような祭りの開催により、日米文化の理解が深まり、嘉手納町と嘉手納基地の人々の友好の輪が広がることに期待が高まります。



めじ良い明日のために



第18航空団広報局
レイ・ラモン等軍曹



2009年11月3日、嘉手納基地に所属する準構成部隊が、バーベキュー やゲームを通してお互いの文化をより良く理解し交流することを目的として、沖縄中央育成園あさひ寮の生徒達を嘉手納基地内へ招待しました。

今回の交流を主催したのは米国空軍航空医療学校第3分遣隊（アームストロング実験室）という部隊で、交流会は嘉手納基地内のロドリゲス公園で行われました。あさひ寮の知的・身体障がいのある生徒達は、隊員達と一緒にゲームをしたり、隊員らが持ち寄ったバーベキュー や他のアメリカンフードを楽しみました。

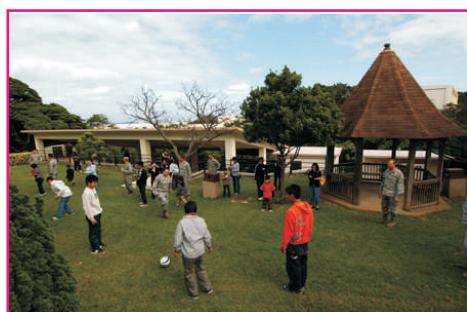
「あさひ寮の皆さんに参加してもらって嬉しく思います。私達は、沖縄や沖縄の文化、皆さんの施設について交流を持ちながら、皆さんのことをもっと知りたい、理解したいと思っています」と第3分遣隊司令官のジェイ・ヴィエタス中佐は挨拶をしました。

あさひ寮は南風原町にある知的障がい児施設で現在20名が共同生活をし、その内15名は県立特別支援学校に通っています。同施設の支援課長である長堂次男さんは、隊員とその家族に今回のバーベキューへの案内に感謝の言葉を述べました。

交流会の企画 調整を行った第3分遣隊のベン・ウインスロー軍曹は、「地域の人達と触れ合うことは光栄であり、一人一人が個人的にお互いを知り合うことが大切で、それが地域との絆を深め信頼を築き上げていくのだと思います。また、米軍基地所在の地元の皆さんに感謝をしたいという気持ちもこめてこのイベントを企画しました」と企画の趣旨を説明しました。



ヴィエタス中佐は、生徒達にとってこの文化の日がユニークで記憶に残る思い出として喜んでもらえれば幸いです、と話していました。



STUDENTS from ASAHI-RYO